



迷走する府民不在の(?) 橋下府政

私たちはこの政権の上半身をうまく使って、橋下府政や阪口市政に迫っていかねばならない。

ただし民主党の下半身はそのまま。前原国交相、岡田外相は小泉構造改革を競い合っている。鳩山首相は改憲論者だ。

この上半身と下半身のねじれが問題を生じさせる。すでに沖縄の普天間基地問題で暗礁に乗り上げていくし、後期高齢者医療制度もすぐには廃止できず、選挙公約を裏切る結果になりつつある。

つまり新政権の中でねじれが生じた場合、私たち市民運動の側は3つの側面からサポートしなければならぬ。まずは躊躇する政権を後から押し出して前へ進める。前へ進むとこの政権はすぐにフラフラするから(笑)、横について伴走し、脇道へそれそうにならなければならぬ。さらには将来ビジョンがないので、素早く前へ回って、進むべき方向を指し示さねばならない。

WTC移転は関西財界の意向 府民生活は衰退するだけ

そんな新政権を利用して市民生活を向上させるためには、やはり地元自治体も変えなければならぬ。橋下知事は大阪全体を衰退させる知事である。

象徴は大阪府庁の移転問題。なぜ彼はあそこまでWTCへの移転にこだわるのか?

それは彼だけの意見ではない、関西財界の意向なのだ。大阪湾岸の再開発に、シャープやパナソニックなど関西家電連合は命運をかけている。省エネブーム、地球温暖化の動きに便乗し、エコビジネスとして世界に出て行く、関空と結びつけて羽ばたこうとしている。これも成功しても、後背地の大阪経済は空洞化し、地域経済は疲弊する。なぜか?

大阪湾岸の家電連合が儲かっても、彼ら財界の目は大阪府民には向かず、中国やインドに向いている。大阪の地域産業は空洞化し、近畿圏の経済は衰退してしまうだろう。湾岸から世界を狙っている財界を、行政が押し上げて、府民生活は向上するどころか衰退するだけなのだ。

吉本興業が支配するメディアで橋下知事が誕生

各地の人々との雑談で、何であんなでたらめな知事を選んだのか、とよく尋ねられる。これは一つには大阪のマスメディアの責任が大きい。

大阪のメディアは全国でも異常である。兵庫県には神戸新聞、京都には京都新聞、つまりローカル紙がある。ローカル紙はある意味健全なマスコミ文化を創り上げている。全国でローカル紙のない都道府県はどこか? 実は大阪と和歌山県だけである。

つまり大阪のニュースを報じるのは全国紙である朝日や読売の大阪版だけ。しかしこれがまたつまらない。では大阪のマスコミは誰が握っているのか?

それは吉本興業である。ワイドショーやバラエティ番組は吉本に席巻されて実にくだらけな番組を作っている。吉本が支配するメディアの中で橋下知事が作られたと言っても過言ではない。

阪口市政を福祉・環境に優しい市政に改めよう

最後に吹田市政について。市長の市政運営の特徴は、阪口氏個人の人脈による政治、つまり人事を縁故で動かしていること。次に市民参加といながら、アウトソーシング、つまり外部委託し、協働という概念を使って、だんだん行政の役割を曖昧にしながら、官

民ワークシテリングという言い方で自治体の責任を曖昧にし、それをガバナンスという言葉で飾っている。そして開発の問題。操車場跡地は民間ではなくJRという準公共機関、また万博や住宅供給公社の立て替えなど、吹田の再開発の特徴は、民間ではなく公共機関が土地を持っていることだ。

つまり公共機関を活用した開発がまだできる環境にある。その特徴をそれぞれの地域がどのように生かして対応できるか、が問われている。

最後に財政問題。確かに税収が落ち込み、かつて比べて財政が厳しいのは事実だ。しかし今すぐに崩壊するような危機的状況にはいたっていない。

阪口市政は人件費を減らす、民間委託を進める、という方法で、硬直化した財政を自分なりに使いたいという意向のようだ。そのような私物化した市政運営ではダメで、もっと福祉や環境に優しい市政運営に改めさせるべきだ。肝心なのは台所事情が苦しいからと下手に浮き足立たないこと。必要な福祉や公共サービスを守りながら、硬直した財政を建てなおしていくことが必要。いずれにしてもこのままの市政運営では行き詰まるので、市政を変えていかねばならないだろう。

アフガン取材報告

罪なき子どもが焼かれ 殺されている

ジャーナリスト 西谷 文和

私は今年10月に自身3度目のアフガン取材を敢行した。カブールの冬は寒い。何よりもまず避難民キャンプに毛布を配らねばならなかった。そして米軍の空爆の実態と、タリバンの本拠地カンダハールで見えたもの、それは罪なき子どもたちが焼かれ、殺されていく現実だった。

神様助けて! 全身を震わせて

写真の子どもはアッサン・ビビちゃん(9)。カンダハール市内で唯一外科手術ができるミルワイズ病院の外科棟で出会った。ビビちゃんの家族はベド

ウイン、つまり遊牧民だった。果てしなく広がる山々の中で羊を追う日々を過ごしていた。

10月6日、家族はいつものように山にテントを張って就寝した。漆黒の闇の中悪魔がやってきた。

「あそこに不審なテントを発見。タリバンの拠点かもしれない。爆撃します」

米軍の戦闘機から放たれた砲弾によってテントは一瞬にして燃え上がった。阿鼻叫喚の灼熱地獄。父は必死でビビちゃん

たが、一緒に寝ていた2人の兄と姉は焼け死んでしまった。

「しまった! タリバンではなくて子どもだった。誤爆を認めた米軍は、全身大やけどのビビちゃんをすぐ上の姉を、カンダハール空港まで運んだ。『ほら、これで病院まで行け』。米兵は200バキスタンルビー(約210円)を伯父

に手渡し、去っていった。謝罪も補償もなし、ただ焼かれただけ。

「神様、助けて」。全身を震わせて、か細い声をしほり出す。のどが渇くのか、絶えず水をほしがらる。少々残酷だが、伯父に彼女の衣服を脱がすように頼む。こ

ちらとしてはやけどの状況をよりリアルに撮影しなければならぬ。『痛いよ、痛いよ。やめて!』

全身を震わせて叫ぶ少女の前に、これ以上ビデオカメラを回すことが出来なかった。

少女が焼かれた 3日後オハマに ノーベル平和賞

この少女が焼かれた3日後、オハマ大統領領にノーベル平和賞が出た。テレビもインターネットもない山の中で暮らす一家は、ノーベル賞はもちろん、アメリカの大統領が誰であるかさえない。

看病する伯父はビビちゃんを指さしながら、「アメリカ、アメリカ」

と叫んでいた。なんと日本人看護師がカンダハールに



ミルワイズ病院には、なんと3名の日本人看護師が勤務していた。この病院は中国の援助で建設され、アフガン政府が運営しているが、政府にお金がないので、国際赤十字のバックアップで成り立っている。その国際赤十字から、伊藤明子さん、苔米地則子さん、井ノ口美穂さんが派遣されているのだ。

「今年8月から、ここで看護師として働いています。病院と赤十字の寮からは一歩も外へ出られません。でも毎日、アフガン人医師、看護師と協力しながら、手術や治療を行っています」